

よみがえる 瑞芳鉱山

―石見銀山と深い関わりを持つ台湾の鉱山―

台湾にはかつて瑞芳^{ずいほう}鉱山という鉱山がありました。
瑞芳鉱山は、台湾が日本の統治下に入ってから間もない
1896(明治29)年に、日本の藤田組(現DOWAホール
ディングス)が鉱業権を得て本格的な開発が進められた
鉱山で、石見銀山とも深い関わりを持っています。

島根県教育委員会では、東アジアの鉱山比較研究
の一環として、台湾の新北市立黄金博物館、国立大学
法人琉球大学と共同で、藤田組による瑞芳鉱山の
開発に関する調査研究を実施しました。

この調査研究から見えてきた、藤田組時代の瑞芳
鉱山の実像について紹介します。



1 瑞芳鉱山とは

瑞芳鉱山は、台湾の東北部、現在の新北市瑞芳區にあった鉱山です。1910(明治43)年に作られた、台湾の地形や名産などが歌われている「臺灣周遊唱歌」にも、

黄金掘り出す 牡丹坑 尚も瑞芳 金瓜石
寶の山は 連れり

という一節があるように、同時期に開発が始まった金瓜石鉱山や牡丹坑鉱山とともに、台湾における金生産の中心的な鉱山として繁栄しました。

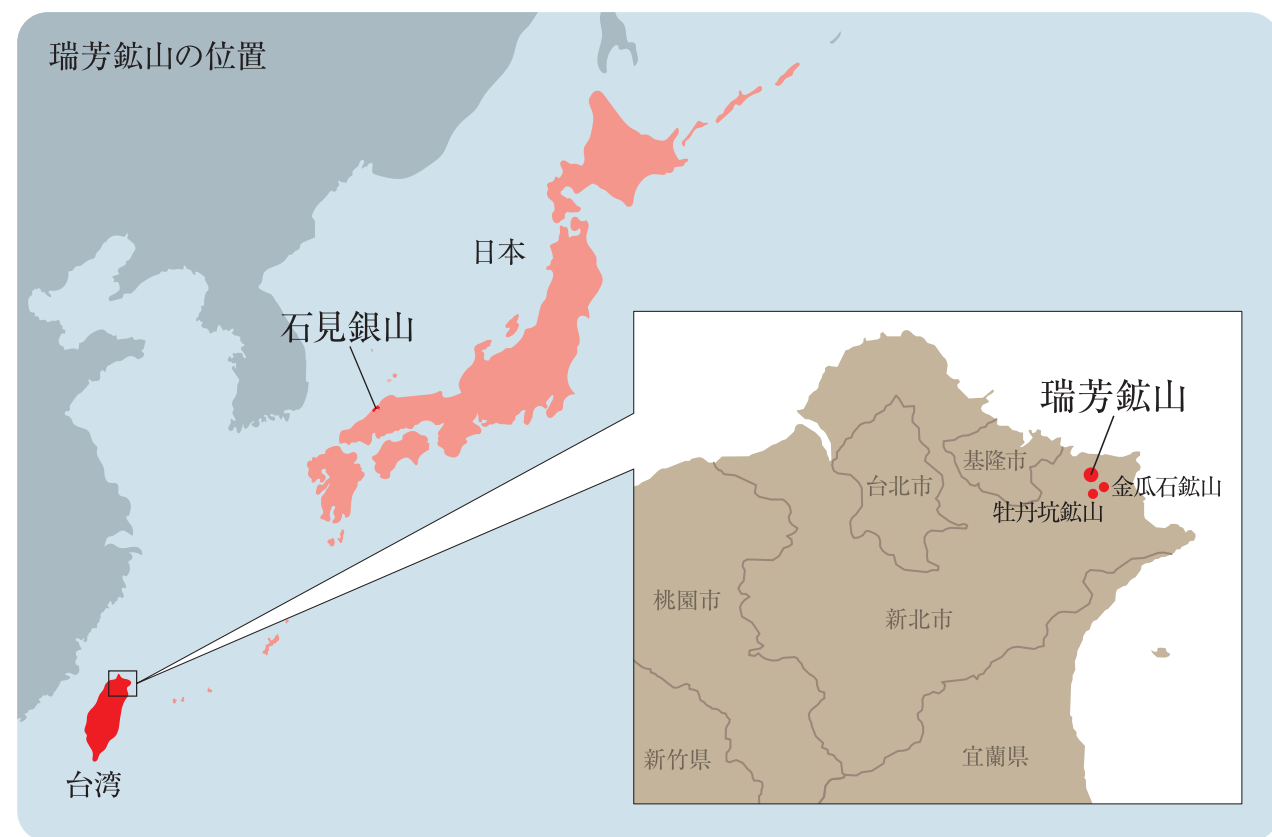
操業は戦後も続けられましたが、1971(民國60、昭和46)年に閉山し、75年にわたる瑞芳鉱山の幕はおろされました。鉱山とともに発展した九份の町は、今では台湾の観光地としてにぎわいを見せています。



瑞芳鉱山で採掘されたと伝わる金。
(九州大学総合研究博物館蔵)



九份の夕景(林金波氏 提供)



清朝時代の瑞芳地域

台湾は、日本に割譲されるまで清の支配下にありました。瑞芳地域における金生産は、清支配下の1890(光緒16、明治23)年にこの地域で金が発見されたことから始まります。当時鉄道の敷設工事が進められており、基隆河にかかる鉄橋が建設されていたところでした。その際、川から砂金が採取されたのです。砂金採取の情報は瞬く間に広まり、多くの人が押し寄せたとされています。さらに1893(光緒19、明治26)年、その上流で金鉱脈の露頭が発見されたことから、瑞芳地域はゴールドラッシュともいえる状況が生まれていました。

清は、集まってきた人々と金の採取を管理するため、金砂局という機関を設置して対応にあたっていました。



基隆市七堵區にある大華橋。この付近で砂金が見つかったとされる。
(黄家俊氏 提供)

台湾総督府による瑞芳地域の調査

1895(明治28)年、日清戦争後の下関条約で台湾が割譲され、台湾総督府(以下、総督府)が設置されました。総督府は、台湾統治に必要な情報を得るため、さまざまな調査を開始します。瑞芳地域にも職員が派遣され、地質や鉱物資源に関する調査が実施されました。その結果、九份山や金瓜石山一帯に

有望な鉱脈が存在することが把握され、報告を受けた総督府は、基隆山の稜線を境に九份側と金瓜石側の二つの鉱業権を設定しました。複数の事業者が鉱業権の獲得を目指しますが、最終的に九份側の鉱業権については藤田組に与えられることとなりました。



「石井八萬次郎瑞芳産金地調査復命書」(國史館臺灣文獻館蔵)

藤田組による瑞芳鉦山の開発

1896(明治29)年、九份側の鉦業権を取得した藤田組は、「瑞芳鉦山」と名付けて操業を開始しました。

開発当初は、九份山に源を発する九份溪の上部を中心に採掘が行われていたようです。そこで採掘された鉦石は、藤田組によって新たに開鑿された四号坑から、軽便鉄軌によって現在の九份國民小學付近まで運ばれ、製錬が行われていたと考えられます。



瑞芳鉦山(大切坑周辺)
「陽坑及大竿林ノ遠望」(宮内庁宮内公文書館蔵)

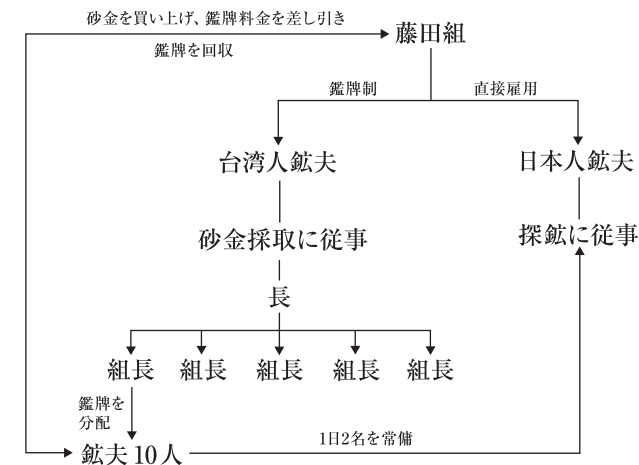
藤田組はその間も採鉦を進めると同時に、本格的な生産に向けて準備を整えていきました。

1903(明治36)年、通洞としての「大切坑」(八番坑)が開坑します。大切坑の開坑以降は、ここから鉦石が搬出されました。そして海岸に面した煥仔寮という場所に、青化製錬所をはじめとする施設が整備され、大切坑から出鉦した鉦石はそこで処理されるようになります。煥仔寮には、鉦山事務所も移転し、周辺には社宅、病院といった施設も整えられました。

藤田組の鉦山運営の特徴

台湾での藤田組の鉦山運営の特徴の一つが、台湾人の積極的な登用です。藤田組は、清の時代に用いられた「鑑牌制」を運営に用い、台湾人を砂金採取に従事させるとともに、採掘技術を習得させて直接採掘に関わる人材として養成することも行っていました。

隣接する金瓜石鉦山ではこのような方法は採用されていないことから、藤田組の鉦山運営の特徴の一つと考えられます。



土地公と坑道

土地公とは土地の守り神のことです。また商売繁盛に関わる神でもあるとされ、台湾では広く信仰されています。瑞芳鉦山の調査では、この土地公が坑口付近に祀られている例が複数あることが確認されています。隣接する金瓜石鉦山では、このように坑口付近に土地公が祀られている例は確認できておらず、台湾人の鉦山労働者が多くいた瑞芳鉦山に特徴的な状況である可能性も考えられます。



九份福德祠(島根県教育委員会撮影)

石見銀山と瑞芳鉦山に関わった人『木村 陽二』

木村陽二は、瑞芳鉦山と石見銀山、2つの鉦山の所長を務めた人物です。

1857(安政4)年、萩の新山家で生まれ、もとは新山陽治という名前でしたが、後に、藤田組を興した藤田傳三郎の妻の実家である木村家に入ったことから、木村陽二と改名しています。

20歳の時に藤田組に入り、大阪の本社や小坂鉦山に勤務を経て、1896年から大森鉦山(石見銀山)の所長として赴任しました。さらに同年、瑞芳鉦山の所長

も兼任し、大切坑の開鑿や煥仔寮の整備に尽力しました。「大切坑」は当時「陽坑」とも呼ばれていましたが、これは木村にちなんだものです。

また煥仔寮に建設の新製錬所に関して、「建築材料及び諸器械は大森銀山の鑛業場に新設した、現在では不要となっているものを用いる計画である。」

と語っているように、石見銀山と瑞芳鉦山という2つの鉦山の効率的な運営を目指した人でもありました。

藤田組撤退後の瑞芳鉱山

1918(大正7)年、藤田組は台湾人の顔雲年^{がんとんねん}に鉱業権を売却し、瑞芳鉱山の運営から撤退しました。経営を引き継いだ顔雲年は、近代的な設備を整備・使用しながら生産を行った藤田組とは異なり、しばらくの間は清の時代に行われていた方法を用いて金の生産を行いました。

しかし1930年代になると一転して設備の

近代化が図られ、その結果、金の増産も進みました。

1956(民國45、昭和31)年、第二次世界大戦後では最大の生産を記録しますが、その後は徐々に鉱脈も枯渇していきます。そして1971年、ついに閉山を迎え、75年の歴史に幕を閉じました。

瑞芳鉱山の遺構と現在の景観



基隆山

この山を基準に瑞芳鉱山と金瓜石鉱山の鉱区が分けられました。標高588mで、山頂からは九份や金瓜石の町が一望できます。



九份溪

瑞芳鉱山の開発初期に主に採掘が行われていた場所です。今は草木に覆われており、その面影はほとんどありません。



大切坑(八番坑)

九份堅崎路と汽車路が交わる付近にあります。操業時の様子をとどめています。



煥仔寮

鉱山事務所や製錬所など、鉱山の主要施設が整備された場所です。現在、それらの施設は残っておらず、更地となっています。

2. 瑞芳鉱山と同時代の台湾の鉱山

金瓜石鉱山

金瓜石鉱山は、釜石鉱山を運営していた田中長兵衛率いる田中組によって開発が始められた金山です。

1896(明治29)年に鉱業権を取得した田中組は、積極的な開発を進め、1907(明治40)年頃には、複数の坑道や製錬所の他、役員や鉱夫の

ための住居、医療、教育、信仰に関わる施設などを整備しました。

その後、この鉱山の所有者は転々としませんが、昭和初期に日本鑛業株式會社が権利を取得し、巨大な製錬施設や住宅地を再整備しました。現在でもその跡地をみることができます。



金瓜石鉱山(新北市立黄金博物館提供)

牡丹坑鉱山

牡丹坑鉱山は、金瓜石鉱山や瑞芳鉱山と並ぶ金の産出量を誇った金山です。現在の鳥取県境港の出身で、台湾に渡り鉱山業、建設業、造船業等で活躍した木村久太郎が開発しました。

1901(明治34)年の大鉱脈発見により活況を呈し、鉱山事務所、坑道、製錬所、発電所などが整備されていきました。また鉱山に関わる人々の住居、小学校、病院などの生活関連施設も整えられていきました。最盛期には1,000人をこえるほどの労働者がいたといわれています。

しかし、大正時代に入った頃には産出量が

減少し、1913(大正2)年に鉱業権を田中組に譲渡しますが、田中組も大正7年に牡丹坑鉱山の操業を停止しました。現在では、一部の遺構が自然の中に眠っています。



牡丹坑鉱山(宮内庁宮内公文書館蔵)

3. 藤田組時代の石見銀山

瑞芳鉱山を運営した藤田組は、明治時代から大正時代にかけての石見銀山の操業も行いました。

1887(明治20)年に鉱業権を獲得した藤田組は、石見銀山(大森鉱山)の再開発に取り掛かります。福石鉱床側では、大久保坑の拡幅や、銀鉱石を選鉱・製錬するための施設としての清水谷選鉱所・製錬所が建設されました。

また永久鉱床側では、永久坑の開発、事務所や選鉱・製錬などの施設が整備されました。

福石鉱床ではほとんど成果があがらなかったため、建設された製錬所もまもなく操業が停止されましたが、永久鉱床では優良な鉱脈の発見により生産が軌道に乗り、最盛期には年平均で銀3.8トン、銅450トンが生産されました。

しかし、1919(大正8)年以降の世界的な不況による資源価格の下落と、採掘に係る経費が増大したことから、1923(大正12)年に操業を停止しました。



清水谷製錬所(石見銀山資料館蔵)

石見銀山と瑞芳鉱山に関わった人『吉永 勘一郎』

吉永勘一郎は現在の大田市大森町の出身で、大森鉱山(石見銀山)と瑞芳鉱山で、技術者として活躍した人物です。

大森鉱山には、1905(明治38)年に採用され、1918(大正7)年に退職するまで約13年間勤務し、坑内測量や分析などの業務に携わっていました。

同年11月には台湾に渡り、藤田組撤退後に事業を引き継いだ台陽鉱業株式会社で次のキャリアをスタートさせ、1941(昭和16)年からは瑞芳鉱山の鉱業所長も務めました。

吉永が大森鉱山と瑞芳鉱山に携わった時期は、両鉱山が最も繁栄した時期でもありました。



(佐川和子氏 提供)

